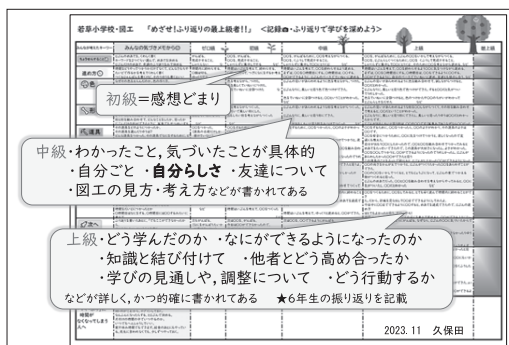


ことで、自己効力を発揮させ、自分らしさを追求し続けられるだろう。図工で身に付けた「振り返り力」で日々の生活を大切に、自己評価や軌道修正をしながら、予測不可能な未来をたくましく切り開いていける人になってほしいと強く願っている。

【参考文献・注】

- [1]久保田智子・森山潤 (2024) 「小学校図画工作科『工作に表す活動』において児童が自らのタイミングで一人1台端末に残す製作過程の記録・振り返りが自己効力感に及ぼす影響」、日本教育情報学会、教育情報研究、第40巻 第1号、pp.15-26
- [2]久保田智子『自ら端末に残す記録・振り返り「マイ・ふり返りシート」作成を通して』、第39回東書教育賞入賞論文 小・中学校 (奨励賞)、pp.47-49
- [3]本校の図工用に設定した振り返りのレベル↓



(「SKYMENU Cloud®」はSky株式会社の登録商標)

奨励賞

【生活科】

生活科実践における「児童と飼育動物が共に生活する場」の可能性

新潟県上越市立有田小学校

たなか こうじん  
田中 行人

実践の概要

小学校生活科において、「児童と飼育動物の継続的な関わり」について課題がある。また、そのような課題を解決できず、教師の一方的な児童への指導により、児童の飼育動物への愛着が形成されづらい実態が全国的に散見されている。本研究では、近年の社会情勢から注目されている概念である「コモン(common)」に着目し、「児童と飼育動物が共に生活する場」を中核にした生活科実践を行い、「児童と飼育動物が共に生活する場」が作り変わっていく過程で、児童の飼育動物への愛着の形成にどのように影響するかを検証、考察し、3つの成果を明らかにした。

論文内容の紹介

1 | 研究の目的

近年、戦争やインフレ、気候変動など、様々な困難が折り重なって、一筋縄では何も解決できない危機の時代にあって注目されている概念の1つに「コモン (common)」がある。筆者は、この「コモン」という概念が、現代社会や未来を担う子どもの育成において重要であると考えている。

本研究では、「コモン」の概念を視点に、小学校生活科「動物飼育」における「児童と飼育

動物が共に生活する場」に着目し、その場が  
くり変わっていく過程において、児童の飼育動物  
への愛着の形成にどのような影響があるかを検  
証し、「動物飼育」の全国的な課題と現状を乗  
り越える指導の在り方を探究することとした。

## 2 | 研究の方法と実践の概要

研究の方法は、生活科「らんらんポニーランド」  
の年間の活動を通して、児童が記述した6回の  
作文シートや児童の様相から、児童の飼育動物  
に対する思考の変容を捉え、児童と飼育動物が  
共に生活する場の教育的有用性や、児童が飼育  
動物への思いや願いを働かせながら関わる人々  
や飼育動物と共に生活の場をつくり変えていく学  
習活動の教育的有用性を検証し、「動物飼育」  
における指導の可能性を考察する。

5月、長野県の牧場から1頭のポニーを校地  
内の飼育小屋に迎え入れ、飼育活動を始めた。  
実践者である筆者は、ポニーの特徴から、学校に  
ある小屋と築山を「児童と飼育動物が共に生活  
する場」として構想し、児童が思いや願いを働  
かせる姿から、その場がくり変わっていく学習  
活動を年間を通して展開した。

## 3 | 研究の成果

成果の1つは、「児童と飼育動物が共に生活す  
る場」をつくり、くり変えたりしていく学習  
過程が児童の飼育動物への愛着を形成したり、  
深めたりしていくことに有効であること、2つは、  
「児童と飼育動物が共に生活する場」をつくる  
教師の「3つの手立て」を明らかにしたこと、3  
つは、児童と飼育動物が離れて生活する場合  
でも「児童と飼育動物が共に生活する場」を生か  
した学習活動の展開によって、児童が飼育動物  
への愛着を深め続けていくことを明らかにしたこ  
とである。

本研究では、以上の3つの成果から、「動物  
飼育」における指導の可能性を明らかにするこ  
とができた。

## 奨励賞

【総合的な学習の時間】

# 持続可能な社会の担い手と なる資質・能力を育む 総合的な学習

石川県白山市立明光小学校

たなか てつや  
田中 哲也

## 実践の概要

本論文では、地域のSDの課題（地域が持続  
発展するための課題）を解決する過程で持続可  
能な社会の担い手となる資質・能力の「多面的、  
総合的に考える力」が育まれたことを報告した。  
子ども達は地域のSDの課題解決の過程から地  
域の未来について自分だけの視点から地域に住  
む人の視点、観光客の視点、社会全体の視点な  
ど多面的、総合的な視点で考える姿が見られた。  
この結果から持続可能な社会の担い手となる資  
質・能力を育むために地域のSDの課題を軸とし  
たカリキュラム・マネジメントの有用性を見出した。

## 論文内容の紹介

### 1 | 研究の目的

筆者はこれまで総合的な学習の時間でSDGs・  
ESDを意識した授業実践に取り組んできた。し  
かし、それらの授業で持続可能な社会の担い手  
となる資質・能力が本当に育まれているのか課題  
を感じた。本論文は、SDGs・ESDの授業実践  
を通して持続可能な社会の担い手となる資質・  
能力が育まれたのか検証することを目的とした。

### 2 | 研究の実際

#### (1)地域のSDの課題を軸とした単元計画

まず、持続可能な社会の担い手となる資質・

能力を明確化した。国立教育政策研究所はESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度の例として7つ示している。その中から本実践では、「多面的、総合的に考える力」の育成に焦点を当て、地域のSDの課題を軸とした単元計画を考案した。実践校の地域では「地域の人と観光客が共存するためにはどうしたらよいか」という地域のSDの課題があると捉え、以下のように単元を計画した。

**【単元計画】（6年生37名）**

- 1次 金沢の魅力は何か？
- 2次 金沢市の抱える課題は何か？
- 3次 よりよい金沢を創ろうプロジェクト

**(2)授業の実際**

1次で金沢の魅力を見つけた子ども達は、観光客に金沢の魅力を伝えたいと考えるようになった。しかし、新聞記事から近年の観光客の増加で地域の人が困っていることを知る。実際に地域の人に調査をすると「交通機関の混雑」「観光客のマナーがよくない」「ゴミのポイ捨てが多い」など困っているとわかった。一方で、市役所が今後、観光客を増やそうと目標に掲げていることを知る。市役所の方にその理由を聞くと「観光客が増えたとお店の収入が増え、税金が増え、市民の生活や学校のためになる」と教えていただいた。子ども達は金沢の未来について話し合い、「地域の人にも観光客にも魅力的な金沢にしよう」と考えた。3次では、その実現のため「金沢の魅力発信」、「交通改善」、「ゴミを減らす」などのプロジェクトを立ち上げ行動した。

**3 | 研究のまとめ**

**(1)実践の検証**

本実践を子どものワークシートの記述をもとに検証した。以下は市役所の方の話を聞いた後のA児のふりかえりである。

「私は市役所の方の考えを聞いて、考えがだいぶ変わりました。前は観光客のメリットは別にな

いと思っていたけど、市民のためになると聞いたのでびっくりしました。観光客の使うお金が増えると生活に関わるお金も増えると分かったので、市民のためになると実感しました。でもやはりデメリットもあるので改善しなければいけないと思います。」

上記のふりかえりから、この学習を通じて自分だけの視点から地域の人々の視点、社会全体の視点など多面的な視点で金沢の未来を総合的に考える力が育まれていると考えられる。

**(2)実践の考察**

本実践でなぜ多面的、総合的に考える力が育まれたのだろうか。それは、地域のSDの課題はさまざまな立場の人の思いや願いが複雑に絡み合い葛藤を生む問いであるからだと考える。地域のSDの課題を軸としたカリキュラム・マネジメントが多面的な視点で物事を捉え自分の納得解、最適解を導き出す学びのプロセスを生み出したのだろうと考える。

**【主要参考文献】**

- ・文部科学省「持続可能な開発のための教育（ESD）推進の手引」（令和3年5月改訂版）（2021年）  
[https://www.mext.go.jp/content/20210528-mxt\\_koktou01-100014715\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210528-mxt_koktou01-100014715_1.pdf)
- ・国立教育政策研究所「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究〔最終報告書〕」（2012）  
[https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/esd\\_saishuu.pdf](https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/esd_saishuu.pdf)

## 奨励賞

【特別支援教育】

# 教師主体でデザインする 生活単元学習の 授業づくり研修

福岡県立小倉聴覚特別支援学校

つねなり たかえ  
恒成 尚江

## 実践の概要

自立や社会参加のために必要な事柄を実際の・総合的に学習する生活単元学習。授業づくりに悩む教師は多い。そこで個々の教師の視点、即ち教師主体にデザインされた授業づくり研修を図った取組が本論文である。この取組で教師主体の学びが実現し、実際の授業づくりが可能となった。年齢、経験の異なる教師にも幅広く対応でき、研修の効率化、効果の高さが実証された。

## 論文内容の紹介

### 1 | 研究の目的

本校の重複障害学級に在籍する児童生徒の増加は顕著である。重複障害学級では、聴覚障害に対する指導上の配慮事項に留意しつつ、知的障害教育に代替する教育課程を編成している。その中心となるのが各教科等を合わせた指導の1つである生活単元学習である。しかし、指導の難しさは長年の課題で、多くの教師は学びを得ようと努めているものの、深い理解のもとに実践されていない。そこで教師の個々の視点、教師主体の視点に基づく授業づくりの支援を行えば、生活単元学習の授業づくり研修の基盤ができるのではないか、その有効性を明らかにすることを目的とした。

### 2 | 研究の実際

#### (1) 教師主体の視点による授業づくり支援

即時的な解決を目指したフレームワークの1つであるD-OODAループを授業づくり支援の参考とした。支援者が基本的な授業づくりの計画(Design)に沿って、対象の教師の授業づくりの様子を観察(Observe)し、その理解状況から支援の要不要を判断(Orient)して、支援内容を決定(Decide)し、実際に支援という行動(Act)を展開させていくものである。実態把握から始まる授業づくりのステップごとに、教師と相談調対話しつつ明確にしていく〈相談〉、教師の悩み等に対して具体的に助言する〈口頭〉、授業づくりに必要不可欠な知識や考え方をシートを使って提示しながら説明する〈サポートシート〉の3つを支援方法とした。また、支援者の心構えを下記のように意識した。

- 対象教師の発言を否定しない
- 対象教師の思いや考えに共感を示す
- これまでのうまくいかなかった事例を語る
- 対象教師の悩みを整理して言語化する
- 対象教師が感じた感動や感想に共感する

#### (2) 「生活単元学習の授業づくりの手引」作成

(1)での教師への支援や質問等の知見を再編し、「生活単元学習の授業づくりの手引」を作成した。協力者8名に依頼し、可読性、視認性、判読性の3観点における検証を行った。協力者からの指摘を加除修正し、手引を完成させた(次ページは手引の一部)。

#### (3) 「生活単元学習の授業づくりの手引」を用いた授業づくり研修

(1)とは異なる教師を対象とし、手引を相読みしながら授業づくり研修を行った。研修後、教師は手引に対応した単元計画シートに単元計画を入力し、実際の生活単元学習の授業を展開することができた。

自然な生活のまとまりって何ですか？

②自然な生活としてのまとまりとは何でしょうか。

私たちの生活には<まとまり>があります。どこかに遊びに行こうとすれば、具体的な行き先を決める、持っていくものの準備をする、そして帰宅すれば荷物の片付けがあります。

これが生活としてのまとまりです。単元の中でも、始まりから終わりというまとまりがある。<活動の終了=単元の終了>ではないのです。

子どもたちは活動だけ取り組んで、片付けは教師がするでは、子どもたちにその機会が提供されていないことになるのではないのでしょうか。

準備や片付けも必要。単元の終わりには感想を交流し、単元を通して再度全体を振り返る。そこで子どもたちは単元の終わりを意識することができるのです。



授業づくりの大前提③

自然な生活としてのまとまりを設定する

### 3 | 研究のまとめ

実践に関わった教師たちは共通した感想を挙げた。生活単元学習をより明確に捉えることができるようになった自信、曖昧に捉えていたことに対する悔い、教科別の指導と生活単元学習を関連づけたことによる児童の変容に対する感動である。教師主体の学びの実現は、形式的であった授業づくりを実際的な授業づくりへと変化させた。それは今後の授業づくりへの強い動機づけを予見させる。

奨励賞

【社会科】

## 政治をもっと身近に ～「本物」との出会いを通して～

広島大学附属三原小学校

まつばやし やすひろ

松林 泰弘

### 実践の概要

小学校6年生社会科の政治分野を対象として実践した。「政治は大人が行うもので、自分達には関係ない」と、子供達の当事者性が低いと感じたことがきっかけである。

当事者性を高めるための手立てとして、

「①子供達の意欲から始まる学習」

「②本物との出会い」

「③自分達の願いの醸成や改善案の提案」

の3つを設定し、さらに繰り返し政治に触れることが必要だと考え、年間を通して3単元（6月・12月・2月）を配置した。

特に「②本物との出会い」に重点を置いて取り組み、「市議会議員」「元自伸会会長」「選挙管理委員会」の方と出会った。その出会いによって起きた子供達の学びの深まりを、子供達の言葉をもとにまとめた。

### 論文内容の紹介

#### 1 | 研究の目的

「大人になったら…」 「今はあまり関係がないから…」 と政治は大人が行うもので自分達とは無関係で遠いものであると感じる子供達にとって、政治が身近に感じられるようにすることを目的とした。つまり、「当事者性」を高めることで、政治への関心を涵養していくことはできないかと考

えた。その手段として、今回は選挙（投票）に視点を置き、そこに手立てを加えることで、子供達にどのような変化が生まれたのかを考察する。

## 2 | 研究の実際

### 【授業実践1】

「低迷する若者の投票率から見えるもの」

#### ■単元の計画

- 第1次 低迷する投票率の実態……………2時間
- 第2次 市議会議員との交流……………1時間
- 第3次 若者の投票率を向上させるための具体的な対策……………2時間
- 第4次 若者の投票率を向上させるには…1時間

### 【授業実践2】

「ようこそ先輩～自伸会選挙から考えよう～」

#### ■単元の計画

- 第1次 自伸会選挙から考えよう。……………4時間
- 第2次 自伸会選挙と国政／地方選挙の共通点を考えよう。……………1時間
- 第3次 12月の自伸会選挙に向けてできることを考えよう。……………2時間

### 【授業実践3】

「選挙管理委員会ってどんな人？」

～みんなの選挙への思いをまとめよう～

#### ■単元の計画

- 第1次 多くの若者が投票行動を起こすための条件を考えよう。……………1時間
- 第2次 条件をもとに具体的な案を考え、提案しよう。……………2時間
- 第3次 1年間の学びをまとめよう。……………1時間

## 3 | 研究のまとめ

1年間の学びを振り返った際、半数以上の子供達の振り返りの中に、出会った人の名前や教えていただいた内容が見られた。また、授業の中でも「市議会議員のMさんが言っていたように…」 「選挙管理委員会のDさんが…」 と、出会った人からの学びをもとに学習が進められる場面があった。政治に関わる人と直接触れ合い、思いを感じることが、子供達の政治への当事者性

を高める大きな要因となることが分かった。

## 4 | おわりに

子供の振り返りに「この3回の授業で、選挙に対して責任感がつきました。自分達のような小学6年生の段階から、投票率の低さに焦りを感じ、改善策を真面目に考えることで、選挙での投票率の向上に対して積極的に考えるようになったと思います。だから、他の場所でも、小学生の段階から選挙についての授業を行うことをおすすめします」とあった。そこから、「大人」と「子供」のような区切りは必要ないと感じた。「こどもまんなか社会」という言葉があるように、大人が子供扱いをやめ、子供も社会の一員と捉えて授業を作っていく必要があると感じた。今後も子供が政治への当事者性を感じられたい、高められたい実践を重ねていきたい。